

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

鵺沼

第十六号

片瀬上飯訪神社境内



片瀬上飯

鵺沼を語る会

上諏訪神社の震災記念碑

伊藤 節堂

大正一二年の（1923）の関東大震災から今年は

六〇周年を迎えた。片瀬の上諏訪神社の境内に

は、当時の惨状を克明に彫り刻んだ震災記念

碑が建てられているので、今回はその碑文を

記録し、追憶並びに防災の資料としたい。

片瀬小学校正門から江のしま道をおよそ

二〇〇m南下すると、山側に石の鳥居があつ

て、急な石段が山腹に続く。そこが上諏訪神

社である。傍の案内板には、信州諏訪神社を

勧請したもので、市内諏訪神社の中では最も

古いと記されている。

苔むした石段は、途中二カ所の踊り場を設

け、全部で七十七段あった。

山の斜面を切り開いた境内には夏草が茂り、

ミンミン蝉が盛んに鳴いて涼を添えた。

社殿に向かって左側、八つ手の葉の伸びたと

ころに震災記念碑が建てられていた。

高さ一四〇cm、巾八二cmで、碑文は裏面に

美しい行書体で鮮やかに彫られていた。

（碑 文）

嗚呼、維時大正拾二年九月朔日午前拾一時五

拾八分、激震俄に起り、其の区域一府四県に亘

る。殊に京浜湘南房総の地惨禍甚だしく、家

屋の倒壊焼失惨死幾万なるを知らず。蓋し、

未曾有の大震なりと云うべし。陛下深く御軫念あらせられ、内需の資一千万円を下し給ひ、次いで大詔を換発して恵撫慈養の道を示したまふ。洵に恐懼に堪えざるなり。当神社も為に、拝殿神輿其他工作物倒壊せしに依り、痛く尊厳を洩し奉るを恐れ、直ちに造り修めなせしも、翌年正月十五日余震甚しく、更に破損の箇所を再修し奉る。氏子の被害亦尠からず。全潰百八拾戸、半潰二百六拾九戸、全焼五戸、流失拾四戸、負傷者五拾二名、死者三拾三名を算し、辛うじて生を得たるもの残壁毀瓦の間に佇みて、漸く一掬の玄米に縋命を繋ぐ。其悲惨悽愴の極み、筆舌の尽す所に非ざるなり。謹みて弥^{いよいよ}御神明の加護に依り、国家社会の安泰を祈り奉り、村長山本益雄外有志相議

り、罹災死亡者の為に慰霊祭を執行し、以て茲に、災記を録して後世に伝えとなすと云爾。

因みに罹災死亡者の氏名を記す

秋元幸太郎（外二十六名連記）

江之島、田淵六弥（外五名連記）

以上 三拾三名

氏子総代鈴木仁左衛門（外七名）

町世話人小池勝五郎（外七名）

大正十三年九月一日建之

村社諏訪神社社掌 相原政雄選書

石工 秋元大太郎

また、片瀬二ノ21の諏訪神社下社も上社と同様倒壊した。復興は昭和十五年二月氏子甘糟五郎右衛門の遺族により再建された。

（昭和58・9・1記）

夜明けのカナカナ

伊藤節堂

(はじめに)

七月十七日の(昭58)明け方カナカナの初声を聞いた。急いで時計を見ると午前四時二十五分、聞こえてくるのは長後上合^{かみあひ}の林の中からであった。

カナカナはヒグラシの名のとうり、日暮れから日没にかけて、もの悲しくなく蟬と思われるから、夜明けのカナカナを聞いた人は少ないと思う。

話は十分古くなるが、私が夜明けのカナ

カナを初めて聞いたのは十六年前の昭和四十二年七月二十二日の朝の新潟県である。

この朝、北東の空がとき色に明るくなって、何とも言えぬ美しさであった。一瞬みとれていたときである。突然「カナカナ・・・」と朝もやのかかった林の中から、その朝もやを破るように聞こえてきた。そしてしばらくの間降るように鳴いた。

一、 東京のカナカナ

それから五年たった昭和四十七年の夏のことである。毎日新聞に、三浦哲朗の「笹舟日記」が連載され、「夜明けのカナカナ」という短編がのった。

「夜明けのカナカナは、鳴き始める日は年によつてまちまちだが、不思議なことに、毎朝鳴き出す時間はきちんときまつていて、それはいつの年でも変わらない。まるで時計でも持っているように、四時十五分から二十分の間に鳴き出す。私はカナカナの声がきこえると、まず自分の時計を覗く癖がついているが、四時十五分より前のことも二十分より後のことも、いちどもなかった。二十分を過ぎても鳴き出さないときは、そのときはもう、今年のカナカナの季節は過ぎたと思わなければならぬ。」と鳴き始める時刻を説明してあつた。

二、新潟のカナカナ

これを読んだ私は、私なりに夜明けのカナカナの鳴く時刻を確かめることができた。それは昭和四十八年七月二十八日であつた。午前四時少し過ぎに目が覚め、四時十五分ころから緊張して耳をすました。

時計が四時二十分をさした。そのとき、南東の方角からかすかに、「カナカナカナカナ」ときこえた。私は幻聴かと思つて耳をすました。が、幻聴ではなく確かにカナカナの鳴き声であつた。

一つではなく、複数で鳴いているので、ちよつとした蟬時雨となり、四時三十五分にぴたりとやんだ。十五分鳴いたわけである。

つぎは、中2日において7月三十一日の朝である。四時少し過ぎに目が覚めた。まだ鳴い

ていない。時計の針を見ながら南東の方
向に耳をすました。そこにはけやきの大木が
何本もあつて、カナカナのねぐらしいから
である。

時間が三時二十分をさした。するとどう
であろう「カナカナカナカナ」とちゃんと
鳴いたではないか。それは恰もセツトした目
覚まし時計のように正確であつた。

この日は四時四十分まで鳴いた。

三、鵠沼のカナカナ

昭和五十三年七月私は新潟から鵠沼に移り
住んだ。

私はここでも当然夜明けのカナカナが鳴く
ものと期待して毎朝耳をすました。

ところが何日たつても一向にカナカナの
声は聞こえなかった。しかしカナカナ

は鳴かなかったが、意外なことに気がついた。
それは、午前四時十八分から二十分までの
間に野鳥が飛んできて、ひとしきり鳴くと、

四時三十五分から四十分までの間に飛び去る
のであつた。この野鳥はあとでヒヨドリとわ
かったが、それにしても、この鳴き始めから
鳴き終りの時刻が、カナカナの鳴く時刻と全
く同じであつた。

鵠沼に移ってから、カナカナの初鳴きをき
いたのは、三週間たった七月二十三日午後五
時五十四分であつた。

ところが、毎日は鳴かずに、つぎは五日後
の七月二十八日であつた。夕方風呂に入つて

いるとき、隣家の松の木から聞こえてきた。

時刻は六時十分で、3回鳴いて飛び去った。

四、長後のカナカナ

鵠沼から長後へ移ったのは、昭和五十五年

九月であるから、カナカナを聞くのは翌年になる。

昭和五十六年七月十四日午後六時五十五分

に長後のカナカナの初鳴きを聞いた。この月

は七月七日から気温三〇度を越える真夏日が

六日間つづき七月十四日も最高温度三一・八度

南よりの風が吹いた。

五十六年は鳴き始め七月十四日、鳴き終り八

月十七日であつた。

昭和五十七年の初鳴きは前年より四日おそ

く、七月十八日午後六時四十分であつた。こ

の月は天候不順で、気温が三〇度を越えたの

は七月十二日だけ、七月十八日も二七・四度の曇り

日であつた。五十七年は鳴き始め七月十八日、

鳴き終り八月二十六日であつた。

カナカナの初鳴き

年月日	時分	時分
53・7・23	午後5・54	(日入6・53) 鵠沼
54・8・15	午前4・47	(日出4・59) "
56・7・14	午後6・55	(日入6・58) 長後
57・7・18	午後6・40	(日入6・56) "
58・7・17	午前4・25	(日出4・37) "

五、真昼のカナカナ

保育社発行の「標準原色図鑑全集」には、

					夏が	に、	唱し	とあ	があ
					りである。森林の中で夜明けと夕暮れ	の悲しくカナカナと、高い声で合	日中はくもったときに鳴く」	が、これについては私も調べたこと	。
					カナカナの鳴き始めの時刻				
					調査年月				
					昭和51年5月				
					場所				
					新潟県村上市（自宅で）				
月	日	8・1	8・2	8・3	8・4				
		午後2・26	午後2・27	午後4・47	午後1・37				
		曇り	雨	雨	晴れ				

前にも述べたように、私たちは、カナカナといえはヒグラシの名のとうり、日暮れから

8・20	8・19	8・18	8・17	8・16	8・15	8・14	8・13	8・12	8・11	8・10	8・9	8・8	8・7	8・6	8・5
午後 6・14	午後 5・14	午後 6・36	午後 2・20	午後 4・53	午後 3・52	午後 1・3	午後 3・33	正午	0・43	3・1	3・27	0・47	1・55	1・12	午後 1・33
曇り	晴れ	晴れ	晴れ	曇り	曇り	曇り	曇り	晴れ	うす曇り	曇り	雨	曇り	曇り	曇り	曇り

日没にかけて鳴くセミと理解していたのだが、このデータは、さらに新しい事実を教えてくれたようである。

ことに、どんよりした曇り空ならいざ知らず八月の晴天下において、正午、0時47分、1時37分など、真昼間にカナカナが鳴いた事実は、誰も信じてくれそうもない新しい発見であった。

以上、長々と書き連ねたカナカナと時刻との関係を、表にまとめて、この項を終わる。

あとがき

これを書きながらカナカナの天敵はヒョドリではないかと思った。新潟にはヒョドリがないようである。だからカナカナの鳴くときは、一山が蟬時雨になる。ところが鵲沼では、カナカナが鳴く時刻にヒョドリがやってくる。ヒョドリの襲^{おそ}げきを逃れた数少ないカナカナが辛うじて生き残っているのではないだろうか。他の蟬も同様である

(昭和58・8・1記)

この異常気象に小さい生命が耐えてくれるかどうか気になる。

4、5年後には植物を殖やして市民の皆さんに公開出来得る様
努力したい。

幻を真実にするために陰のお力添えを賜った諸兄先生方のご
努力とご協力に対し衷心より感謝申し上げます。今後ともご
指導賜りますようお願い申し上げます。

(鎌倉東慶寺ならぬ) 東京大学理学部へ駆け込みを計った。幸か不幸か当日は資料館と植物部門は新館へトラックで引っ越しの真っ最中で担当教授にはお目に掛かれぬと受付で断られた。移転先を訪ねて直接大場秀章理学博士にお目に掛かれた。事情を訴え大学保存の鵠沼蘭の標本と照合をお願いした。大場先生は採収蘭の花と根を注意深く観察された後で先生のお部屋に案内された。部屋は引っ越しを語り足の踏み場もない。机上の書籍を取り除き腰掛を探していただいた。

大場先生は「貴重な蘭の様である。詳しく調べて見たいので後日連絡を……」。私はこの蘭が鵠沼蘭と認定されたら大学より鑑定書を発行のお願いをした。自信に満ちて浅井先生を訪れたが不在であった。

4月28日東大の大場先生より正真の「鵠沼蘭」である、持参の蘭は大学の標本として保存したい、この蘭については不明の点が多いので今後の調査に協力されたい、との依頼があった。

浅井先生よりもご連絡を戴き真物の「鵠沼蘭」であり私の理論は取消す、お目出度うと今後の蘭に対するアドバイスがあった。

5月13日東京大学総合研究資料館植物部門より「鵠沼蘭」の鑑定書を送付して戴いた。

鵠沼蘭については来年度より本格的調査に入る予定で、

この方のところへお伺いしてお話の様子によると、松露（しょうろ）は召し上がっているし、蘭については2,3年前小鳥が運んできたのか、白い花が咲き今年もたくさん殖えた（選挙パンフレットの写真に似ている）とのことであった。

松露は松の根つ子に散生していた。蘭は図鑑と照合してみた。（ぎんらん）かと思あやまるような葉形、葉数は「鵠沼蘭」に似通っている。開花まで待つことにした。

4月25日蘭の茎が10cmも伸び上り、蘭は15個のうち2輪が純白に脹み先端が僅かに開いていた。蘭を採取した。諏訪先生にお目に掛けた。「まだ実物を見たことがない、ひよつとすると……」先生の教え子で帰化植物の浅井康宏氏に見て戴くよう紹介された。（氏は藤沢市片瀬出身）

浅井先生からのお電話で「私は20年間鵠沼蘭を探していたが見当たらない。服部静夫（帝国大学）博士の採取された蘭は（はまかきらんとぎんらん）の突然変異であると思う。実在しないのでは……」採集した蘭を持参するよう指示があった。

私は浅井先生の思いもよらぬご意見に自信を失い掛けたが、突然変異は数多くはできるものでない。鵠沼蘭の資料はない……一夜をまんじりともせず考えた末、東大の標本と照合して自信をつけて、浅井先生に採取蘭をお目に掛けようと計画をした。

ら 15 日間未知の蘭を捜して、成果がない自分が哀れであった。

文献には「和名鵠沼という地名で、今は藤沢市に属し
すつかり市街になったが、以前は前面に江ノ島を控えた静かな
保養地であった。（中略）現在では土地開発で松林はほとんど
伐られ、ハマカキランとともに貴重な *type locality* の殖生が
失われたのは残念である」と記されている。

主な土地開発を調べてみると、昭和 6 年 9 月より 11 年 8 月
までの府県道片瀬大磯線（鎌倉郡片瀬町竜口寺前府県道片瀬・
鎌倉線を起点とし、海岸線に沿い海軍用地手前を浜見山經由 中
郡大磯町郵便局前に於て国道 1 号線に合する 16,722 米区間（
現 134 号線）に結ぶ道路と海水浴、住宅、別荘等）が開発され
ている。

せっかく地名のついた「鵠沼蘭」を幻でなく実物を探し次の
世代に伝えるため

地元選出番場県議に計画と趣旨を説明して、千葉県に「鵠
沼蘭」の殖生について照会を依頼した。

発見の動機は次の通りである。58 年統一地方選挙に番場定
孝氏は「自然が教えてくれる今日までの湘南 そして 明日か
ら」をテーマとして（鵠沼蘭と松露）を照会され、この小さな
自然が失われていくのは残念で生活環境等の保護が急務である
と訴えられ上位で当選された。この選挙パンフレットを読まれた
方から情報をいただいた。

地名のついた「鵠沼蘭」の名を御存じの方は少ない。
この蘭を見た方は殆どないようである。私が「鵠沼蘭」を知ったのは6年くらい前のことである。ある調査のために古老をお尋ねしてお話を聞くうちに「鵠沼蘭」の名前が出て来た。どんな蘭であろうかと古老にお尋ねして見ると、まだ見たことがないとの返事である。地名のついた蘭に興味をもったが実在しているものかと図鑑等を調べたが見当たらなかった。その後蘭のことは忘れていた。

56年3月「藤沢の自然と植物」と題した諏訪松男（現高谷小学校長）先生の講演を聞いた。「幻の鵠沼蘭」について言及され、私にとって再びの出会いであった。

それ以来「鵠沼蘭」の資料調査を行ったが、余り文献が少ないのは残念で記録の調査も行い、山野草植物愛好家をお尋ねして廻うたが、今は実在しないとの返事であった。

同年5月初め諏訪先生をリーダーをお願いして「鵠沼蘭」の植生調査を辻堂、鵠沼の大きな屋敷内と引地川周辺で行ったが、やはり幻であった。

牧野図鑑によると「相模湾沿岸から千葉県にかけて海岸砂丘松林の中に自生する」とある。

鵠沼、茅ヶ崎までの海岸砂丘松林の中をくもの巣と戦いなが

昭和 5 8 年 9 月 1 3 日 発行

鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4

鵠沼公民館内

電話 3 3 - 2 0 0 1、2 0 0 2